PHAYAOレポート 2008-17（～山のモンの人たち～）

スタディツアー参加者からの報告　（日刊新周南　連載記事から）

藤屋侃二さん(68)　下松市幸ヶ丘　元KRY取締役ラジオ局長

山のモンの人たち

二人の青年が勢いよく餅をつくと日本にいるような錯覚に陥る。ラオス国境に近いタイ北部の山の村、ナムカーの人たちが餅をついて歓迎してくれた。

あえて日本との違いを探せば、日本のうすは円形だが、モンのうすは舟型である。

タイ国王がモン族のためにロッジを五棟建てたナムカー村に三日間滞在したが、この間、二回も餅をついてくれた。最初は歓迎のために白餅、二日目は土産のために赤米。丸く平たくして、バナナの葉に包んでくれた。

モンの人たちも日本と同じように正月や祝いごとに餅をつく。餅つきは日本人とモンの人たち以外にはない習慣という。日本人そっくりの顔つきの人が多く、赤ちゃんには蒙古斑（はん）が出る。

餅つきを見ながらモンの人たちの祖先と日本人の祖先は同じだったに違いないと改めて思った。

四十人余りが入れるロッジ下の集会所は壁は一面だけで、その壁の前に奥行き一メートル、幅二メートルのガラスのショーケースが二つあった。

中は三段になっていてランチョン・マットなど刺しゅう製品が並んでいる。村の婦人たちが作ったもので、ロッジを利用した人の土産品の陳列ケースだ。

日ごろの買い物は妻の担当だが、今回は病気で妻は参加できなかったので早速、買い求めることにした。

一バーツは約三円。値段札を見ながら日本円ではどれくらいか計算したが、安い、とにかく安いので全部買い占めたくなる。

ケースの一番端に藍染めの反物があった。モンの人たちが藍染めの文化を持っていることに驚く。

シャンティ山口の佐伯事務局長によると、今タイ北部の山に住んでいるのはラオスから来た人がほとんどで、ラオスのモン族は藍染めが盛んだという。

値段を見ると五百バーツ、藍染め一反がわずか千五百円だ。

クロスステッチの刺しゅう製品は娘が関わるパレスチナの製品とよく似ている。地域や民族によって多少は違うが、人間の営みは同じだと実感する。

モンの婦人たちは大変働き者で、農作業はもちろんだが、時間があれば家族の民族衣装や土産用の刺しゅう製品を作る。

赤ちゃんを背負った幼稚園の先生が売店の責任者のようで、たくさん買ったので、にっこり笑ってるてる坊主の人形をプレゼントしてくれた。

（元山口放送取締役ラジオ局長）

モンの人たちの餅つき

ポシェット、人形にも刺しゅう

妻への土産の上着と藍染めの反物